

裁判員制度への応用社会心理学的アプローチ： モード論に依拠する法心理学の情報的正義としての可能性

わかばやし こうすけ

若 林 宏 輔

本論文は、法学と心理学の接点にある法心理学領域に対して応用社会心理学の立場からアプローチするものである。具体的には、日本の裁判員制度に対し、情報的正義の達成へ向けてモード論という学術方法論(Gibbons, 1994; Sato, 2001; 2012)の視座を通して検討を行う。その基本は「司法に対し心理学が可能な貢献は何か」という問いにあり、この問いに対して本論文は 10 章から成る 4 部構成でこの問いへの回答を試み。

第 I 部では、まず法心理学領域の知識生産によって、日本司法への市民参加を運営・維持することの支援を提案した。モード論は学際領域を「学融」的協働へと導く理論であり、本論文はこの理論を法心理学の領域へ展開した。学融には両学範が、現実の社会問題を解決して社会貢献を果たすために、各学範の目標に固執するのではなく、互いの学範を理解し共通の目標を設定することが求められる。よって本論文は法心理学領域の共通目標として情報的正義を示した。これは「市民が証拠として採用が法学的・心理学的に許容される証拠に基づき、市民が公正な判断をする」ための刑事司法を構築するための概念である。

次に第 II 部では、3 つの心理学実証研究から成る 3 つの章で構成された。これらの研究では刑事訴訟法上問題ある証拠として、複数目撃者の目撃証言の歪み・公判前報道による予断形成・そして取調べの可視化の偏りのある録画方法について扱った。心理学実証研究はすなわち人間の心理プロセスに内在するバイアスの指摘である。第 II 部では、これら心理学固有の知識生産を法学の俎上で扱うために情報的正義を用いた。情報的正義の観点から、刑事訴訟法手続きにおいて、どのような情報が、市民が公正な意思決定を行う上で証拠として用いられるべきなのかについて議論した。

第 III 部は、筆者自らが開発したテキストマイニングの手法を用いた新たな分析方法を用いて刑事裁判の評議過程を分析した 3 つの研究から成る。「評議は、誤判から判決を保護することを意図する主要な法的予防措置」(Edmond, 2011; Goodman-Delahunty et al., 2012)である。しかし、評議がどのように行われたかを研究する手法はこれまで法学の中には存在しなかった。新しい分析手法により評議の内容と評議構成員のポジショニングの構造を視覚化することが可能となった。さらに、この分析を用いて陪審制と参審制の評議を構造の点から比較した。

最後に第 IV 部は、各部結果から、日本司法への市民参加の意味を再構築し法心理学の可能な貢献について考察した。さらに、討議可能な民主社会の達成のために市民、公的機関そして研究者がどのような役割を果たすべきかについて示した。

Applied Social Psychology in the Japanese Mixed Jury System in Japan: Approach from Informational Justice of Law and Mode Theory

こうすけ わかばやし

Kosuke Wakabayashi

The focus of this work is on establishing the new approach for the recently introduced lay judge system (Saiban-In-Seido) in Japan, applying the Mode theory (Gibbons, 1994; Sato, 2001; 2012) in prediction of the Informational Justice.

On part one, we proposed the support for the citizens' participation of judicial systems in Japan by law and psychology knowledge. Firstly, we sought to provide the knowledge support system for exercising the citizen participation in Japan's judicial system. The Mode theory gives unique perspective to collaborative research in the field of the law and psychology: It requires interdisciplinary understanding and the sense of common purpose to achieve real problem solving and contribution for society. The informational justice can serve as a common purpose for both the law and the psychology field, since their specific contributions to the improvement of the criminal justice procedure would assist the citizens to make fair decisions based on admissible evidences.

Secondly, we describe three experimental studies that addressed the issue of inadmissible evidences in the Japanese criminal justice system, such as the eyewitness testimony, pre-trial publicity and the video taped forced confession. Taken together, the results of these empirical studies raise a question of the information use in the criminal procedure and how it can affect lay judge decision-making.

Thirdly, a new statistical text mining method was suggested to aid analysis of the deliberation process in criminal trials. This technique was applied to establish relationship between the members and the deliberation content allowing us to compare structures between the jury system and the mixed jury system.

In conclusion, we discuss how the role of citizens, public institutions and researchers should be reconsidered to achieve the deliberative democracy in the society.